SHOW-HEYシネマルーム

★★★★

ジェイン・ジェイコブズ ニューヨーク都市計画革命

2016年／アメリカ映画
配給：東風＋ノーム／92分

2018（平成30）年6月9日鑑賞　シネ・リーブル梅田

Data

監督：マット・ティルナー
製作：ロバート・ハモンド
編集：ダニエル・モルフェシス、アンドレア・ルイス
声の出演：マリサ・トメイ／ヴィンセント・ドノフリオ

みどころ

１９８０年以降、都市問題をライフワークとし、阿倍野再開発訴訟を戦った私もジェイン・ジェイコブズを知らなかったが、本作を観て、目からうろこ！

「常識の天才」ジェイン・ジェイコブズＶＳ「都市計画の帝王」ロバート・モーゼスの戦いとは？そして、モーゼスに「待った！」をかけたジェイコブズの思想とは？

高層化、巨大化するビル。団地と、どこまでも伸びる高速道路は都市の象徴。そんな発想が間違いで、目下修正中だとすれば、中国のそれは大問題！もっとも、それは他人の国の事。私たちは本作の鑑賞を契機として、人口減少社会の中で新しい都市計画のあり方を模索している日本の事をしっかり考えたい。本作は都市問題の教科書として必見！

――＊――＊――＊――＊――＊――＊――＊――＊――＊――＊――

■□■女性都市計画家、ジェイン・ジェイコブズとは？■□■

「常識の天才」と呼ばれている女性の都市計画家、ジェイン・ジェイコブズ、私はその名前を全く知らなかった。また、「世界を変えた一冊」と言われている、彼女の著書『アメリカ大都市の死と生』、これも私は全く知らなかった。弁護士１０年目の１９８０年以降、都市問題をライフワークとして活動してきた弁護士の私ですらそうなのだから、都市計画に興味のない人はジェインの名前すら知らないはず。したがって、日本での本作のヒットはムリ！私はそう思っていたが、意外にも「建築や都市計画に興味のある人たちの間で話題」らしいから、喜ばしい。

本作のイントロダクションでは、ジェイン・ジェイコブズと本作について次のとおり書

かれている。すなわち、

1961年に出版された「アメリカ大都市の死と生」は、近代都市計画への痛烈な批判とまったく新しい都市論を展開し、世界に大きな衝撃を与えた。今や都市論のバイブルとなったこの本の著者は、NYのダウンタウンに住む主婦、ジェイン・ジェイコブズ。建築においては一介の素人に過ぎなかった彼女の武器は、その天才的な洞察力と行動力だった。本作は、当時の貴重な記録映像や肉声を織り交ぜ、“常識の天才”ジェイコブズに迫った初の映画。都市は誰がつくり、誰のためにあるのか？ 私たちが暮らす街の未来を照らす建築ドキュメンタリー。

また、パンフレットの冒頭にあるＤＩＲＥＣＴＯＲ‘Ｓ　ＳＴＡＴＥＭＥＮＴでは次のとおり解説されている。すなわち、

1950年代、ワシントンスクエア公園の真ん中を通る４車線の高速道路を走らせたいディベロッパーやニューヨーク市と州の公共事業を取り仕切っていたロバート・モーゼスたちによる都市計画に対して、ジェイコブズをはじめとするグリニッジ・ビレッジの住民と活動家たちは、正式な異議申し立てを行った。彼女たちは近隣住民たちとコミュニティを形成し、市を相手取り道路建設への反対運動を展開した。反対運動の輪は次第に広がり、あらゆるレベルの市庁職員に手紙を書くキャンペーンなどを通して、ジェイコブズと仲間たちはついに勝利を手にし、モーゼスの公園を破壊する計画は流れた。今日、これとよく似た闘いがある。それは、バーニー・サンダース氏の選挙キャンペーンであり、一般市民を顧みない権力者のトップダウンのやり方に飽き飽きした人々による草の根運動だ。僕は本作で、都市に対する市民の権利の主張、そして今から半世紀以上も前に繰り広げられたワシントンスクエア公園に関するジェイコブズたちの闘いについて描いた。現代のビッグバンクの役割や１パーセント程度の富豪による政治的影響への抵抗と同じように、ジェイコブズとグリニッジ・ビレッジの住民団体メンバーは、一般市民が、表面上は市民に仕えているように見せながら実は個人に忍耐を強いる権力構造に対して闘ったのだ。彼女は彼女が生きた時代において唯一無二であり、現代の見苦しい政治的な陰謀を暴くために信頼に足る人物だと思う。

■□■敵対する「都市計画の帝王」ロバート・モーゼスとは？■□■

建物（ビル）の高層化・巨大化と高速道路の建設。それこそが近代的都市の建設であり、豊かな国アメリカ、その代表都市であるニューヨークの象徴。第二次世界大戦後、「世界唯一の超大国」になったアメリカでは、そう信じられていた。そして、１９５０年代のニューヨークでは「伝説のパワーブローカー」で、「都市計画の帝王」と呼ばれているロバート・

モーゼスの都市計画論に沿ってその建設が進められていた。彼こそ「モダニズム」という理想を掲げたアメリカの都市計画家の代表だ。

彼らは街を高いところから見降ろし、スラムや交通渋滞を把握し、地域を取り壊して団地を建て、歩道をなくして高速道路を作った。それによって、多くの近隣住民が立ち退きを余儀なくされたが、それに対するモーゼスの反論は、「害を与えることは何もしていない。迷惑や不便を感じる人たちがいること承知している。だが卵を割らずに、オムレツは作れないのだ。」というものだった。

日本では戦後、「世界のタンゲ」と呼ばれた丹下健三やその弟子である黒川紀章らの有名建築家が輩出したし、近時は隈研吾も有名になっている。また、世界を放浪しながら独学で建築を勉強し、今では東大教授になっている異色の建築家、安藤忠雄も有名だ。日本でもアメリカと同じように、モダニズムと反モダニズム、そしてポストモダニズムの対立があることはよく知られている。しかし、アメリカではジェイコブズＶＳモーゼスのような激しい対立が学問上も実践上も展開されていたことにビックリ！

なお、蓑原敬氏も有名な建築家だが、彼を世話役としてアラン・ジェイコブズの「サンフランシスコ都市計画局長の闘い」（学芸出版社、98 年、原著名“Marking City Planning Work”AIP）を共訳する作業の中から生まれた著書「都市計画の挑戦　新しい公共性を求めて」（学芸出版社、00 年）は興味深い本。もちろん同じジェイコブズという名前だが、本作の主人公ジェイン・ジェイコブズとアラン・ジェイコブズとは違う人物だ。本作の鑑賞を契機として、ジェイン・ジェイコブズとロバート・モーゼスはもちろん、アラン・ジェイコブズについてもしっかりと勉強したい。

■□■モーゼスに待った！ジェインの思想は？■□■

そこに「待った！」をかけたのが、ジェイン・ジェイコブズだ。彼女の「街を元気にする４大原則」は次のとおりだ。

①街路は幅が狭く曲がっていて、各ブロックが小さいこと

②再開発をしても、古い建物をできるだけ残すこと。

（家賃が安ければ若い学生や芸術家も住むことができる）

③各地区には必ず二つ以上の働きを持たせること。

（多様な人が多様な目的で、さまざまな時間に訪れる）

④各地区の人口密度が十分高いこと。

また、彼女の代表的著作『アメリカ大都市の死と生』にみる、ジェイン・ジェイコブズの言葉をパンフレットから引用すれば、次の通りだ。

都市は万人に何かを提供できます
でもそれは、
万人によってつくられた時だけです

都市の衰退を、交通渋滞のせいや
移民や中流階級の気まぐれのせいにするのは簡単です
都市の衰退は、もっと深刻で複雑なのです
問題は、人々が自分の望みを知らず都市の働きを知らないことなのです

無秩序に見える古い都市の下には
その古い都市が機能している場合
街路の治安と都市の自由を維持するための
素晴らしい秩序があります
それは複雑な秩序です
全てが動きと変化で構成されていて
暮らしであって芸術ではないけれど
都市の芸術形態と呼び、“踊り”と考えましょう
単調で精度の高い踊りではない
全員が一斉に足を上げてそろって回りお辞儀をするのでもなく
複雑なバレエです
個々の踊り手やアンサンブルが別々のパートを担いつつ
奇跡のようにお互いを強め合い
秩序だった全体を構成するようなものです

しかして、これらの思想を武器にジェインは、モーゼスと当局を相手にいかなる戦いを・・・？

■□■私の戦いＶＳジェイン・ジェイコブズの戦い■□■

私は１９８４年９月、阿倍野の第二種市街地再開発事業をめぐる訴訟を提起し、一審は敗訴したが、高裁と最高裁で勝訴し、今でも法科大学院の教科書に載せられている歴史的な判決を勝ち取った。また、岡山県津山市では、再開発を巡って日本初となるさまざまな裁判を戦い、歴史的判決を勝ち取った。

このように、私は市街地再開発事業を中心とする都市問題について日本全国からの相談を聞いて依頼を受け、交渉、裁判等さまざまな形で弁護士としての戦いを続けてきた。も

っとも、私の場合は、当初は住民側、再開発反対側からの依頼が多かったが、次第に事業を施行する再開発組合や行政側からの相談を聞き依頼を受けるケースが増えた。それは、交通事故で加害者側、被害者側双方の依頼を受けるのと同様、弁護士という仕事の性格上当然のことで、よりよいまちづくりを目指すという目標は同じだ。

もちろん、その目標はジェインとモーゼスの場合も同じはず。それなのに、これほどの対立を生んだのは一体なぜ？本作が導入部で描くジェイコブズの戦いは、①ワシントンスクエア公園の戦い②グリニッジ・ビレッジの戦いだが、本作ではそれを鑑賞しながら、その論点を的確に把握する必要がある。都市計画は算数のように１＋１＝２と割り切れるものではないから、その優劣、得喪の判断は難しい。それを踏まえて、ジェイコブズとモーゼス双方の言い分を聞くことが大切だ。

■□■ローワーマンハッタン高速道路の戦いとは？決着は？■□■

本作後半からクライマックスにかけての焦点は、ローワーマンハッタン高速道路の戦いになる。エルバ島に流されたナポレオンは、その後密かにエルバ島を脱出してパリに戻り、奇跡的に皇帝として復活。そして、再び大軍を率いて「ワーテルローの戦い」に挑んだが、残念ながらイギリスとプロイセンの連合軍に敗北し、ナポレオンは「百日天下」に終わった。しかして、１９６０年に起きたローワーマンハッタン高速道路計画とは？そして、それを巡るジェイン・ジェイコブズとロバート・モーゼスの戦いとは？そして、その決着は？

それを本作でじっくりと鑑賞し勉強できたのは幸いだった。それまでは不満があるとすぐに辞任すると役人を脅かすことによって、「都市計画の帝王」として君臨していたモーゼスが、ここでも同じような戦術（脅かし？）を取ったところ、ロックフェラー市長は意外にも即座に OK の返事をしたから、モーゼスはビックリ。それによってモーゼスは辞任を余儀なくされ、これがモーゼスの「終わりの始まり」になったらしい。ちなみに、ローワーマンハッタン高速道路計画として描かれた絵は、ある意味「これぞ、近未来の理想図」とも言えるものだが、そんな「功の部分」に対して「罪の部分」は・・・？

ローワーマンハッタン高速道路計画が１９７０年に正式に建設中止になったのは、結局負の部分が大きいと判断されたため。そして、これを契機として、全米で同じような道路建設計画が市民たちの反対によって頓挫していったから、明らかに都市計画の理念や方向性が切り換わったわけだ。人口減社会を迎えている私たち今の日本人は、そのことをしっかり考える必要がある。

■□■団地の解体と再生は？■□■

『シネマ 38』では「『団地』をテーマに日仏３つの名作が」の小見出しで、①『海よりもまだ深く』（16 年）（250 頁）②『団地』（16 年）（255 頁）③『アスファルト』（15 年）（260 頁）を取り上げた。

大阪では、千里ニュータウンと泉北ニュータウンを中心とする団地（ニュータウン）の再生が大きなテーマだが、その合意形成は困難で長期間を要している。それに比べると、本作に見る（公営）団地の解体（＝ダイナマイトによる爆破）シーンはすごい上、その決定は早い。１つや２つならいざ知らず、アメリカではあちこちでこんな風に（公営）団地のダイナマイト爆破による解体が広がっていったわけだ。しかして、そんな解体後の団地の再生は如何に？本作ではそれは描かれていないので、それも含めて団地の再生のあり方をしっかり考えたい。

他方、皮肉なことは本作が指摘するように、中国の大都市では延々と連なる高層団地の風景が見えること。これは、私が中国旅行に行き、北京や上海等の大都市で高速道路を走っている時にいつも見る風景だ。日本のマンションは6階以上が高層マンション、２０階以上が超高層マンション、タワーマンションだが、北京や上海では５０階建て、６０階建てのマンションが文字通り林立しており、その風景はある意味で異常。さすが１３億人の人口、とある意味で感心させられるが、ひょっとしてこれは６０年後にすべてダイナマイト爆破で解体される運命なの・・・？そう考えると、今はテーマになっていないが、将来発生するであろう中国の団地の解体と再生が大問題になることは必至だ。もっとも、これは他人の国の事だが、アメリカには遅れたものの、都市計画においては中国の先輩（？）として、これについても日本人はしっかり考えておきたいものだ。

２０１８（平成３０）年6月１４日記